## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

·	
Title	商品の二要因の対立について:反省規定の論理学
Sub Title	Antagonisms between two factors of s commodity: logic of determinations of reflection
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.4 (1949. 4) ,p.213(1)- 233(21)
JaLC DOI	10.14991/001.19490401-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

勞 井 藤 補正を得て勞働組合保障の参考たるべく完璧を期した。 究に戰後の日米兩勞働運動の概況、我國組合の實例を加筆の上、藤林敎授の懇切なる校閱 かを描いた。民主主義國家への更生期にある日本にとり有意義なる資料である。リカ民主主義の理想が國民の生活様式として世界史上はじめて恒久的な憲法制度に結晶した。植民地十三州のアメリカ人が、いかにして英本國の支配を脱れて獨立をかちえたか、アメ 勞働協約の骨子をなすショップ制の問題を我國において最も早く手を着けた井原教授の研 原林 働 黻 铲 リカ革命 糺 三 著 閱 湚 組 著 B 6 判 煛 B 6 剣 綸 二六二頁 一三三頁 定價 定價 一三〇圓 七〇圓 應 慶 出 版 祉

# 二田學會雜誌

雜誌 第四十二卷 第

昭和二十四年四月

# 商品の二要因の對立についる

――反省規定の論理學―

小引

究のための端初的オボエ書きをなすものである。 本稿は前稿(「價値表現の兩極について」本誌、四一卷一○號)と相俟つて我々の今後における價値形態論の本格的研

にあつかつた範圍内においての樞要點はたゞ一つである。それは劈頭の簡單な商品の價値規定をあくまで資本のロゴ スとみる我々の立場から、 つでもあろう。 一つの稿はか」る我々の解釋のための根本的前提をあたえるものであろう。 (ひとり貨幣發生の必然性を理解する鍵がそこにあるというだけでなしに………。) が本稿及び前稿 おそらくそれは「資本論」中最も難解な部分の一つであろう。と同時にそれは最も重要な部分の一 「資本論」第一卷第一篇第一章第三節 第三節における價値形態の發展をも厳密な意味では資本のロ は極めて困難ないくつかの論理を有しており、その理解 獨自の見解はこの基礎的論點 ゴスとみようとするにある。

商品の二要因の對立について

の上に展開されるであろう。

めざるをえない。 題はこの適應の立入つた内容なのであり、事情なのであり、そこに我々はある種の屈折と、したがつて制限とをみと る!)させている。資本制商品説をとる河上博士すら第三節からはじめて論理が歴史的發展に適應すると云われて、 しその場合、この一致を簡單、安直に解したくないのであつて、もとより論理としての簡單な價値形態が歴史上未發 頁。)もちろん我々もまた價値形態の發展における論理的なものと歴史的なものとの一致をみとめるものである。但 1る立場に立たれている。(「資本論人門」、第一分冊、一一八 從來の諸見解はすべて、(すべて、 これあたかも價値法則の生産價格に對する歷史的先行性に關する我々の理解の仕方に擬えることが -その論理の單純、抽象性の一面において である!) かの價値形態の展開の論理に歴史的商品形態の發展を即應へ即應で -適應しうるであろうことはこれをみとめる。たゞ問 九頁。第二分册、 一三、一五、四九

はとゝでヘーゲルにあまりにたよりすぎたととについて一言なきをえない。すでにしてエンゲルスの指摘をまつまで ◎なく(「カール・マルクス『經濟學批判』第一冊」、M・E全集、第七卷の三、三七頁以下、「ルドイッヒ・フォイエ ッハと獨逸古典哲學の終末」、同全集、第一二卷、九〇五頁以下。「コンラット・シュミット宛一八九一年一一月 極の意味をたどしくとらえるために先ず商品の二要因の對立の意味を嚴密に理解すべく努力が試みられた。蓋し簡 本稿は前稿のいわば準備的段階をなすものであつて(發表の順序の逆となつた事情については後記。)、價値表現の の手紙」、同全集、第二二卷、四二一頁。其他。)、ヘーゲル辯證法はマルクスによつて批判的に克服されたので 前稿で述べた如く 商品の二要因の内的對立の外化したものに外ならぬからである。なお我

立つべき本稿の發表のおくれた事情はこれによる。 規定に關して强調したが、との點を更に布衍するために本稿が書かれたといつてよい。本稿はもと「價値論爭史」に 收錄する豫定のととろ C前稿、註一〇ン、內容に適わぬため 割 愛しこゝに發表するところとなつたのである。前稿に先 ある。けれどもマルクス自身、「資本論」の「論理學」というものを書きのこしていないので、我々はヘーゲル 論 理 品の二要因の單なる分離と區別さるべきその對立、しかも絕對的 なお本稿執筆の直接的動機について云えば、前著「價値と價格」へ特に七五 か危惧を有するのであるが、したがつて自己檢討をかさねたいと思つているが、なお忌憚なき批判を期している。 の「資本論」理解への適用に際して大きな困難に逢着せざるをえない。 のギリギリの對立ということを簡單な商品の價値 ての點、 大頁。及び八六頁、註一〇<sup>3</sup> において 我々の試みに對して我々自身いさ

## 第一節 區別の二契機

**勞働)の統一物たるにすぎぬ商品である。換言すればそれは一面價值乃至抽象的・尺間的勞働としての商品、** 用價値乃至具體的・有用的勞働としての商品である。 象されているとともにまたひとり二要因 スはかつて簡單な商品と云われるものの抽象性について論じた。C註し要するにそれは資本制生産諸關係 (使用價値と價値)乃至二重の勞働(具體的,有用的勞働と抽象的・人間的 他面使

ntität mit sich) 商品であるから、 ま價値乃至抽象的・人間的勞働としての商品をとり 自己のうちで反照を行う。 にあると云える。蓋し價値乃至抽・勞 自己との同一性とは價値乃至抽・勞としての商品の反省的 あげてみる。 (抽象的· 人間的勞働の略稱)としての商品は本質としての それはか」るものとして自己との同一性 自己關係であ

使用價値は決して物として直接にあるものではない。 それは生産過程によつて根據ずけられており で一言すれば使用價 (具體的· それは一箇の具・勞の實存形態をなしている。 しかも交換價値の質料的擔い手として後者を根據ずけて 有用的勞働の略稱)としての商品もまた本質としての

がつて本質的に區別 者を外部にもつものではなくしてこれをうちに含んだ自己同一性である。「本質は、それが自己に關係する否定性、 ひきはなされた同一性の立場にたつのである。本當の意味での同一性とは區別を含んだものである。價値乃至抽・勞 たがつて自己から自己を反撥するものである時のみ、 としての商品の自己同一性はその意味でその他者たる使用價値乃至具・勞としての商品からひきはなされた或いは後 のが考えられないのではない。 (Unterschied) の規定を含んでいる。」(註二) 一性ということも単にそれにとざまることを許されない。しかるに外的反省 しかしそれは同一性の外部に且つこれとならんで區別をもつ。したがつて區別か で、かくして得られるものは抽象的同一性である。この立場においても區別とい 純粹な同一性であり自己自らのうちにおける反照である。 (äussere Refle-した

かくして我々は同一性から區別へとすゝんだ。「大論理學」の敍述を辿ると、この區別は次の如く展開する。一絕對 これである。 Unterschied) 口差別 (Verschiedenheit)、 回對立 (Gegensatz, Entgegensetzung)、 四矛盾 (W-

る區別の根本特徴はすでに日の中に見出される。 さて當面の問題についてみれば、 本稿の意圖する範圍内で 同じ商品のうちにあるものとしての使用價値乃至具・勞と價値乃至抽・勞とが 即ち區別の二契機としての區別と同一性とが、 とくに重要なのは日と目との識別である。 しかし日より何にい これである。 右

過程と價値形成=增殖過程との相異なる性格、 ての使用價値と價値、 如き區別における二契機を有するということである。即ち使用價値と價値との區別なることはこゝに述べるまでも 前者は商品における感性的なるもの、物的諸屬性(質的規定)であり後者は超感性的なるもの、幻的對象 勢とは商品にふくめられた勞働の二重性としてそれぞれ統一物を形成している點において同一性を 具・勞と抽・勞はそれぞれまた同一性をも有する。 また具・勞と抽・勞とが區別の關係にあることは生産過程における二契機としての勞働 とくにそとで作用する勞働の質的差異を想起すれば足りる。けれども 即ち使用價値と價値とは商品の二要因とし

Urgrund aller Thätigkeit und Selbstbewegung zu betrachten.) 的な根源と見做さるべき事柄である。」(Diesz ist als die wesentliche Natur der Reflexion und als bestimmter るのである。かくして同一性も區別もそれぞれ全體であるとともにまたその契機をなしている。區別はその他者卽ち な反省の區別の立場においては、單なる區別は區別ではない。 の規定根據に於てという意味である。 一性を自分のうちに有し、一方同一性は區別の規定へ入りこみその契機となることによつて自己を維持する。この 「人は云う、二つの物は……の點で五に區別されていると。 而してこの事質は反省の本質的な性質として、凡ての活動性及び自己運動の規定 故にとの區別は反省の區別であつて、定有の他在ではない。」(註三)とのよ むしろ區別は同一性に關係してはじめて區別たり -『……の點で』とは唯一同一の見地に於て、 (註四) このことを銘記せよ。

**濫しこの區別の二契機とそたゞちに差別の二契機たるものであり、** この點は後見する如くであるが、 商品の二要因としての使用 且つ差別より對立への發展の基礎となるもので 價値と價値とを、叉勞働の二重性としての具

指定されるであろう。 の面をも區別の中へひきいれかの區別の自己反省、區別の契機とすることによつて、 ての區別に墮す。 「凡での活動性及び自己運動の規定的な根源」たることの認識をたゞしくもつことができるであろう。 區別がふくむもう一つの面、 かくして又、 我々ははじめて、對立物としての使用價値と價値とが、具・勞と抽・勞とが、 同一性の面、商品の二要因としての、 又勞働の二重性としての同一 區別はその本來的な姿におい

我々は價値乃至抽・勞としての商品の自己同一性=反省から出發した。(あるいは使用,價值乃至具・勞としての商 別とをみとめた。このような基礎知識をもとにして我々は差別及び差別より對立の段階へとすらむ。 性から出發してもよい。)そしてかゝる自己同一性が區別をふくむこと、そして區別の二契機としての

## 第二節 差 別

## A 差別

ま我々は卽自且向自的な區別、本質の區別としての絕對的區別に關して區別の二契機について語つたところであ この二契機は區別における被措定有であり規定性であるが、しかもその各々がこの被措定有の中にあり 已反省(契機としての一面化)の狀態にあるとき、區別は差別と呼ばれる。

差別の特徴については、「小論理學」の中で簡單に次の如く記されている。

あつて、 K 直接的な區別、すなわち差別である。差別のうちにあるとき、區別されたものは各々それ の關係に無關心である。 したがつてその關係は各々に對して外的な關係である。 差別のうちに

ことになる。」(註五)そして差別の段階においては、關係させられるものの同一性は相等性(Gleichheit)、その不同 あるものは區別に對して無關心であるから、 區別は差別されたもの以外の第三者、比較をするもののうちにおかれる と不等性との本來の面目がある

反照し合う状態にないため、それらの 的であってそれぞれの規定性に無頓着なるも の規定の中にありながら單に自己に關係するものとして、自己關係としてあるにすぎない。 等性及び不等性の相等性及び不等性たる所以である。卽ち差別の段階においては相等性と不等性とは區別乃室同一性 夫々の規定性に無頓着であるところの差別的なも 兩者の同一性と區別 對して關係せず、また不等性は相等性に對して關係せず、 値と價値、あるいは具・勞と抽・勞とは差別の段階においては、それらの區別の契機だる相等性と不等性とが五 面的である。 即ちまえに區別と同一性とに關してそれらがともに區別乃至同 一大論理學」においては更に差別の内容について詳論されてい 差別の段階においては兩者は反照し合わないのである。いなむしろこうした外的區別のうちにあることこそ相 故に五に差別する存在は同一性 ニエンゲルスの指摘する如く資本制社會成立以前五六千年もの間存してきたところの 引用者」はそれ自身に於て區別されているものではないため、從つて區別は兩者にとつて と記されているものを使用價値と價値、あるいは具・勞と抽・勞と讀め。 同一性及び區別として相互に交渉し合うことなく、むしろ相互に無關心 のとして相互に關係し合うにといまる。 及び區別として相互に交渉しあうのでなく、 の一般として關係しあうにすぎない。」(註六)として「互に差別 二契機の各々は互に規定し合うことがない。「このよう るが、 一性の契機として互に反照し合うということを述 て」では要記するにといめる。 ムる事態は資本制商品に先行 寧ろ相互に無關心的で且 かくして相等性は不等性 即ち使

てみられるところである。 しよう。 先ず我々は原始的交換形態たる直接的生産物交換についてマ ルクスの述べるところをみ

商品となるや否や、それらは反動的に、 初には全く偶然的である。 體・あるいは外の の物の所有者たちの意志行為によつてである。 體の諸成員にとつては一 彼が相互的であるためには、 る。 對象の ンカ國・等々の形態を有しようと 互に獨立せる人格として、 値である第一様式は、 ح 「直接的な生産物交換は、 定在である。 では交換以前には商品で の絶えざる反復は、 諸共同體の諸成員・と接觸する點で、 分はい 諸物は、 非使用價値としての、その所有者の直接的欲望を超過する分量の使用 それ 意。 圖。 -その共同體が家父長制家族の形態を有しようと、古代インド的共同體の形態を有しようと **對應し合いさえすればよい。しかし、** 人々はたど、默つてかの譲渡されうる諸物の私的所有者として、また正さにそれゆえに そのれの 絶對的に人間にとり外的なものであり、 らの 一面では簡單な價值表現の形態をもち、 はなくて、 物が交換されうるものであるのは、 を。 内部的共同生活においても商品となる。それらの物の量的な交換關係は、最 質存しない。 交換によつで初めて商品となる。 正。加 To. で生産されざるをえない。これしい社會的過程たらしめるかれてれするうちに、他人のかれてれて 商品交換は、 始まる。 ところが、 諸共同體の終るところで、諸共同體が外の諸 か」る相互に他人たる關係は、 他人の諸 それらを相互に譲渡しあおうとする、それ 從つてまた譲渡されうるものである。 ్ష్మం ٥. ح 他面ではまだこれをもたない。 の。瞬。 諸物がひとたび對外的共同生活において だ。 か。 使用對象に對する欲望が次第に確立 ある使用對象が可能性から云つて交換 使用對級Bである。 50 方。 で。 經。 値としての かれの 自然發生的な共 AおよびBなる物 **τ**ο 要求に動物 ・その の形態は と の 共同 \$

値から分離する。 る。諸。 それらの物 の有用。 性:0 他方で 交。換の 値の さいとのしの Do て固定させる。」 これる量的關係は、ことの間の、分離が確定 企业也 そのれの れらの生産そのものに依存する。諸物の使用價値は、 存。 すっそっとっちっちっちっちっちっちっちっちっちっちっちっちっちっちゃ ようになる。の物の交換の 交。换。

の導入による發達せる商品交換においてもそれが單純商品の交換であるか 對立をみとめることができないであろう。 いて我々 みとめるも (詳しくは私の諸著参照。) のは商品の二要因の對立ではなくして單なる分離でしかない。 ぎり にお V ては我 々は本來の意味におけ 更化

及び不等性としての同一性又は非同一性は、 一性であり、 してある。 ような差別の段階においては「或者が他の 我々はなお差別の論理を辿るとしよう。 Dritten)に他ならない。」(註八) 事柄である。 したがつて相等性は同一性ではあるにしても被措定有としての同一性、 一方不等性は區別 兩者は各か たい ではあるにしても即自且向自的に不等的存在それ自身の區別をなすものではない。 自己にの 差別の段階においては相等性は外面 寧かなの二つの或者の外に在るととろの第三者 み關係してい 或者に同等文は不等であるという關係は、 てい 即自且向自的にそれ本來のまいである。 的な同 即自且 どの或者のいと 向自的ではないところの 不等性は の顧慮 (die Rücksicht 4外面的な區別、 ずい れにも係わり 而して相等性 7

來往的關係はこれらの規定自身にとつては外面的であるにすぎず、 々は向自的に或る第三者に關係してい 的反省は差別の狀態にある或者と他の或者とを相等性と不等性とに關係させる。 比較は相等性から不等性へと、 かくして外的反省におい また不等性から相等性 また兩規定は相互關係的ともならずに寧ろその各 ては相等性と不等性とは相互に無關係なも へと來往する。 ح の關係は比較 がこの相等 性と不等性との (das Vergleic-のとし

て五に差別する二つの存在に關係させ、 においてそれらは不等ではない、 一面からみれば互に相等であるし、他面からみれば互に不等であると云われる。また二つの存在は相等であるかぎ 外的反省の立場は相等性と不等性とを「……の限り 即ち相等性はたゞ自己にのみ關係し、 かくしてこの兩者を分離する。 かい かくして差別の狀態にあるとき或者と他者と 同様に不等性は單に不等性であるにとゞま て」とか、「方面」とか「顧慮」とかによつ

が第三者である點、差別する二つのものの區別は內面的區別たることを失つて單に 外面 的 較そのものは存在そのものに内在的なものでないと云いうるしく註九)。また相等性と不等性との尺度となるべきも されば差別においては、 外的反省が比較によつて差別するものの相等性と不等性とを規定するにからわらず、 なものとなるとも云え ح

止揚=對立への移行の内因が見出せるのである。ヘーゲ 己同一たるにといまつており、 にしてはじめてそれ自身となりうるにもからわらず、 相等性と不等性とは前述の如く元來區別の兩契機である。 こくでは區別は解消している。これが差別の根本特徴であるが、 差別の段階においては兩者の無關心性のために兩者の各々は N の述べるところをきこう。 したがつてこの兩者はそれぞれその他者との區別を基礎 こ」にすでに差別

日く「併しながら兩者(相等性と不等性」 引用者」は斯かる分離「外的反省に基く分離 即ち或者は或る顧 換言すれ **寧**o 呼ろその破壞者なの願慮に於ては他者と ば兩者は、 つて

はそのために共に相等性であるにすぎない。」(註一1) 斯かる關係を所有 のみ關係し、 してってのの のであるというような相互的關係である。 されることに於て始めてそれ自身となるのである。 して いて、これをよそにしては何等の意味をも持たね。各自は、區別に含まれる二規定と 相等は不等ではなく、 併し兩者の無關心性のために同等性は唯 又不等は相等ではない。 換言すればその各 自身に

## B|差別から對立への發展・

現存を前提してのみ意味を持つ、ということをわれわれは認めているからである。區別を指摘するという課題が與 等性と不等性とが互に反照し合わないでいる。しかるにこの兩者は元來 我々はさきに差別の根本特徴たるものが同時に差別から對立への進展の内因を含むと述べた。 そしてこのような差別から對立への進展は一 われわれは大した慧眼を認めないし、他方、よく似ているもの(例えば『ぶな』と『かし』、寺院と敎會)にし 反照し合うべきものである。かくし兩者はその本性に基くところのその否定的統一において反照し合い對立と 等性を見出しえないような人を、われわれは相等性を見出す勝れた能力をもつている人とは言わない。つまり 區別の際には同一 相等性を見出すということは區別の現存を前提してのみ意味を持ち、逆に、 その區別が一見して明かなような對象(例えばペンと駱駝のように) 性の際に は區別を要求するものである。」(註一二)このような區別とそ對立と ーゲルによれば――普通の意識のうちに見出されるという。「と (絕對的)區別の兩契機たるものである 區別するとい しか區別しえないような人

だが對立は決じて差別 の單なる絶對的區別への復歸 Verschiedenheit) (註一四) である。 それは「規定的區

換言すれば比較の第三者を介さずに各々がその他者を自己の他者とする場合、 側面を同時に全く唯一の否定的統一の契機にすぎないものとしているところの差別は對立である。」(註 **過別している場合を指す。** へ、換言すればそれ自身相等性と不等性との區別であるような反省へと還歸する。 「斯くて相等性及び不等性そのものい即ち被措定有は無關心性叉は即自有的反省を通じて自己自身との否定的な統 對立とは區別の兩契機たる相等性と不等性とがそれぞれその他者を媒介として自己に反省している場合を、 金一六 あるいは二つのものが相互的に自己 而して自己の互に無關心的な二 一五とう一度

性の比較の事例としての「ぶな」と「かし」あるいは寺院と敎會の相等性と多かれ少かれ似通つた程度のものに の立場にたつ。だからとくにおける使用價値と價値、乃至具・勞と抽・勞の相等性なるものは、 ペンと駱駝の不等性と多かれ少かれ似通つた程度のものにどゞまつていると云わねばならない。 商品に限を轉じると、これに含められた互に差別する二つの存在たる使用價値と價値、乃至具・勞と抽・勞は、 段階においては、一面からみれば互に相等であるし他面からみれば互に不等であるという外的反省、 さて我々は相等性と不等性との兩者が關係させられている「唯一同一のもの」 (das eine und dasselbe) また使用價値と價値、乃至具・勞と抽・勞の不等性なるものも、 前述の拙劣なる不等性の比較の事例とし

相等性と不等性との面貌が異ることとなる。

より鋭細に考えられるにしたがつて、 發展せる差別は對立である。」 (註一七) その兩方面、 相等性と不等性ともそれだけ明瞭に鋭細

別されたものは自己に對して他者一般をではなく、 關係のうちにのみ自己の規定を持ち、他方へ反省しているかぎりにおいてのみ自己へ反省しているのであつて、他 ら、各々は他者のうちに反照し、 れ自身の中に包含するところの不等性である。「兩者の各々は、それが他者でない程度に應じて獨立的なものであ の中に包含するところの自己反省した自己相等性である。一方、消極者とは自己の非有即ち相等性に對する關係 積極者(das Positive)と消極者 (das Negative)とである。積極者とは不等性に對する關係をそれ 各々は他者に固有の他者である。」(註一八) 他者があるかぎりにおいてのみ存在する。したがつて本質の區別は對立であり、 自己に固有の他者を持つている。言い換えれば、一方は他方と

ち消極者は「自己自身のうちにおける區別の區別」であると述べられる。 積極者は同一性にちがいないが、しかもそれは無規定な同一性ではなく、 關係であるとともに他者に對するものとして規定されているからである。 がそれは同一性でないという規定のうちにおける區別そのものである。 より高い眞理における同一性である。 消極者はそれ自

るかぎりにおいてある。二、そ の各々はその他者がないかぎりにおいてある。 とめられる。 積極者と消極者との各々はその他者 <u>=</u> その各々はそれ自身において

積極者であるとともにまた消極者、消極者であるとともにまた積極者でもある。

それ自身であることを得る。 るということに於て成立する。兩者の存立は離れることの出來ない唯一的な反省である。それは唯一的な媒介であ 二つの事質は對立一般の持つ唯 Ø) 故に一般に各自は第一 それは他者の非有を通ずることに依つてそれ自らであり得る。即ちそれは自己への反省である。 積極者と消極者とを構成するところの規定は、この積極者と消極者とが第一 即ち各々は單に被措定有であるにすぎない。ところが第二にそれは他者がない限りに於 一方が積極的で他方が消極的であるのではなく、寧ろ兩者は相互に否定的「消極的」 他者がある限りに於て有る。各々は他者を通じて、即ち自己の非有を通じて始めて 的な媒介なのであつて、積極者と消極者はこの媒介の中に於ては一般に單に被 般である。言い換えればその各々は單に他者に對して對立せしめられた 非有を通じて、從つて自己の他者換言すれば自己の非有を通じて存在 とてろがこ

に於て所 の中へ取り戻されているのである。 却つてその被措定有、即ち一つの統一内での 極者と消極者は第三に 同様に消極者も或る他者に對 的な反省規定である。 積極者は他者への關係 一つの被措 從つてその各々は對立せしめられたものの斯かる自己反省の中で始めて積極 即ち各自はそれ自ら積極的であると共に消極的でもある。積極者と消 する 定者にすぎないものではなく、 この中に積極者という規定性が存在するのであるが のとしての消極者であるのではなく、 兩者それ自身はこの統一ではない 又無關心的存在にすぎない 寧ろ積極者と 加 ――他者への關係はすぎないものでもな 同様に、

ひとたる債務者にとつての消極者は、他方のひとたる債權者にとつては積極者である。また方向という例をとつて 消極者を積極者と呼ぶこともできる。例えば財産と負債とは特別の獨立に存在する二種の財産ではない。 への道程は同時に四への道程でもある。 たらしめるところの規定性を自己自身に於て所有する。」〈註二〇〉ひとは積極者と消極者とを絕對の區別 たがつて我々は積極者を消極者と呼ぶてともできるし、

いても、 何故なら磁石の北極は南極なしには存在しえず、 たがつて積極者と消極者とは本質的に制約し合つているものであり、相 互 關 係 においてのみ存在するものであ 陽電氣と陰電氣とは獨立に存立する別々の流動體ではない。 に磁石を切斷してみて、 一方には北極、 他方には南極があるなどというようなことは云いえないであろ 南極もまた北極なしには存在しえない からである。同様に電氣

立するものと見ることにある。」このような本來の對立の事例として我々は更に無機的自然と有機的自然とを、ある 個別すしんでは對立を考えるであろう。だがこしではすべてが相互に無關係であるにとどまつている。 に反して、このような無關係を排して諸事物の必然性を認識することにあり、他者をそれに固有の他者に もまさにそのことによつて他方に關係するかぎりにおいてのみ、 (註二一) 私は人間であり、私の周圍には空氣、水、 區別されたものは自己に對して單に 我々は無機的自然を有機的自然とは別なものとみるべきではなく、有機的自 兩者は本質的な相互關係のうちにあり、各 動物、及び他者一般があると云う場合、 或る他者を持つのでなく、 存在するのである。同様に自然も 々はそれがその他者を自分から排 自己に固有の他者を持つ 常識はこいに 「哲學の目

似を絶對に許さぬものである。 らぬと述べた。まことにその通りであつて、使用價値と價値との對立は、 作に單なる差別を對立と同等なものと認めないことである。しかし人々はよくそうしたことを行つている。」〈註二二〉 一然と精神、 き對立の尖端にお なしには存在せず、精神は自然なしには存 の他者でもある。要するに使用價値は價値なしには存在せず、 「かし」と「ぶな」、などの事例にみられる區別質は差別と使用價値と價値との區別 ーゲルがあげたいくつかの對立の事例、財産と負債、東と四、北極と南極、 るであろうから。 のとしてではなく自己に固有の他者としての他者をもつている。 あつて、これに反して、 即區別という絕對絕命のギリギリの對立においてあるのである。 一般に重要な一步前進である。 などに我々は我々の當面の課題である使用價値と價値とを加えるべきである。 これは學問上本質的な進步である。 いて兩者の對立を把握せよ。蓋してへに到つてはじめて矛盾 (Polaritat) として知られた對立を、全自然を貫いているもの、 ニソ日く 先に述べたように、 使用價値と價値との區別は本質的區別であり、その各々は自己に對して他者一般に屬 價値は使用價値があつては存在しないのであるから、 「思惟する理性 こういう言い方をする場合、 たびこの場合大切なことは、 (智能) は鈍くなつた差別的なものの差別を、 價値は使用價値なしに この自己に固 われわれはまだ偶然的なものから脱していな 『なお別なことも可能だ』と言うのをやめ 「なお別なことも可能だ」というような發 切角それまで進みながら又しても無雜 陽電氣と陰電氣、 普遍的な自然法則と認めるに至 自己運動の生ずる前提があたえ 使用價値と價値とは區別即同 質は對立とを同一視してはな 他者なるものはまた自己に必 まえて、 現代の自然科學は、 有機物と無機物 表象の單なる多様 ペンと駱駝、

本質的な差別にまで、 對立にまで尖鏡化する。多樣性は矛盾の絕頂に登りつめてからはじめて相互に對して可 そして自己運動と生動性との内的脈動たる否定性を獲るのである。」 金三三

れは勞働力をも含む)の交換をはじめとしてこの社會における經濟的全運動過程が生じ來るのである。 本制社會においては勞働過程が價值增殖過程に從屬され還元される。これを根底として具體的・有 用 的 勞 働の抽象 の二契機に對立化され、 との對立化がみられる。だから使用價値と價値との對立の直接の根據は商品にふくめられている勞働の二重性の確立 して一方の他方への從屬、 般に資本制的に生産されることである。 (註二四) そしてこゝに我々が肝に銘ずべきことはかゝる二條の對立物が決して平行的に存在するものではな ひいては使用價値の價値化ということが徹底的に遂行される。 ひいては商品にふくめられる勞働の二者闘爭性 還元というかたちをとることであり、その上で運動も生するということである。 してこのような意味での眞の對立にみちびく根據となるものは何か? これによつてはじめて商品の生産過程が勞働過程と價値形成=增殖過程と 具體的・有用的勞働と抽象的・人間的勞働 かゝる事質を基礎として商品 それは商品 即ち資 2

「資本の直接的生産過程は、資本の勞働過程および價值增殖過程であり、 (註二五) 商品生産物を結果とし剩餘價値の生産を

本制生産方法を最初から際立たせる二つの特徴がある。

確かに資本制生産方法の區別的特徴である。 産諸方法から區別するものではない。けれども下 生産物を商品として生産する。 商品たることが生産物の支配的な決定的な性質だということは、 を生産するということは、こ の生産方法を他

とされて いるということである。」(註二六) 資本制生産方法を特に際立たせるもう一つの特徴は、剩餘價値の生産が生産の直接目的とされ決定動機

値ということが使 用 價 値の普 遍的な質際の定有形態であることをも看拔いていたのである。(註二八) 云うまでもな してこの發見は終る所がないからである。だからして新しい欲望は、それを直接的に有つている者からではなく、 と稱する所のものは、全く汲み譃し得ない無限に進行して行くものである。好都合な狀態も次々に不都合となり、そ しるその發生によって利得を求める者によって引き起される。」(註二七)彼はまたこの社會においては社會的使用價 によつて利潤を獲得するものによつてなされることを洞察していた。曰く「イギリス人がコンフォ 同じような結論に到達しうるのではないかと思われる。これらの諸點は今後矛盾論の考察に際して明らかにされ して反省を試みる手懸りを得たのであるが、もつともこのことは有論と本質論との綜合的再考察によつてもある 使用價値は社會的使用價値としてはもはや單なる交換價値の質料的擔い手 (我々はかくしてマルクスの商品分析論の立場よりヘーゲルの抽象的論理學における對立論に 「法律哲學」においてブルジョ ア社會に おいては、 物質的基礎としてしか意味を有し

により初めて批判的に證明されたものである。」〈註二九〉と述べている所以である。マルクスはそれを證明した(na-ある。マルクス自身勞働の二重性の節の書出しにおいて「商品に含まれている勞働のかゝる二者闘爭的な本性は、私 それはなるほど分析によつではじめて検出されてそすれ、もとより分析を俟つものとしてすでに客觀的にあるもので 「資本論」劈頭の商品分析は右の如き對立=統一關係に立つ商品の二要因及び勞働の二重性の檢出を課題とする。

第三の共通物の存在をドグマ乃至「先驗的構成」と見做すにいたるであろう。この點の認識は肝要である。 劈頭で分析されている商品のロゴスとしてもつ資本制的性格もまたとしてあらためて確認されねばならね。 chweisen)のであつて發明したり案出したのでなはい。 るが(註三〇)、ともかくこれを見失えば多かれ少かれ、使用價値の捨象を蒸溜法と見做したり、商品交換における ーゲル流に云えば有の自己內運動としての反省を追思惟したまでである。この點かつて我々の論じたところで マルクスの分析は對象に固有の論理にしたがつたのであつ

の全展開過程の樞軸たるものであることは、我々のすでに述べたところである。(註三一)しかしその場合においても 二要因、二重性の對立の論理的意味、とくに矛盾の論理的意味について立入つて述べなかつたから、とゝでこの點を つの對立=矛盾關係とそ、「資本主義社會の經濟的運動法則」の倚つて立つ基點であり、 我々は更にすゝんで商品における二要因、及び勞働の二重性のもつ矛盾的關係についてみなければならぬ。との二 いわば「資本論」のその後

**無關心であるような第三者をその中に存在させている。即ち十でも一でもなく、** れている第三のもの、 ととによつて矛盾をおかす「有限な悟性の命題」である。蓋しこの命題は第三者を排除しようとしつゝ事質上對立に 慎極的又は消極的に規定されていて、 らわされる。それによれば、AはAかAでなければならぬという。かくしてすべてのものは對立せる存在であり、 對立の規定は普通の意識においてはいわゆる「排中律」 (der Satz des ausgeschlossenen Dritten) という命題で ^ Aそのものが現存している。かくして↑か ^ であるべき筈の或物は↑にもまた ^ にも關係せし 第三者がしめ出される。 しかしこの命題は矛盾を避けようとして却てそうする じかられとしてもA としても定立さ

本論」の具體的敍述に即してヘーゲルの抽象的論理學の檢討を期するものである。) 立の論理、とくに差別と對立との識別について論じたにとゞまる。(我々は矛盾論においては **湾において我々はこの課題を遂行するであろう。本稿においてはかゝる矛盾の論理に先行しこれが基柢たるべき對** 例は使用價値と價値との統一としての商品にもそのまる妥當する。即ち「商品は使用價値であるか又は價値 もあるのである。このような對立物を統一せる商品に關して矛盾の論理を追求するのが次の課題となる。 れども商品は自身使用價値でも價値でもないが、しかし同時に使用價値で 前述の如く

(註一) 抽著「價值論爭史」、第一章第三節。

版全集、第八卷、 二七〇頁。松村二人氏譯、三一五頁。

金 敷を記さぬ。 「大論理學」、第二卷、グロックナー版全集、第四卷、五一六頁。鈴木權三郎氏譯、中卷、

同、五一六 七頁。譯、大五頁。

金組工 「小論理學」、二七一頁。譯、三一六頁。

金銭 「大論理學」、五一八頁。譯、六七頁。

金也 ○一傍點のみ引用

「大論理學」、五一九頁。譯、七〇頁。傍點引

(註九) 武市健人氏著「ヘーゲル論理學の世界」、中卷、六六七頁。

金一〇 四一九頁。譯註二〇。

一頁。譯、七一 - 二頁。○傍點のみ引用者。

〈註1二〉「小論理學」、二七四--五頁。譯、三一九 -二〇頁。傍點引用

金三三 「大論理學」、五二三頁。譯、七六頁。

同、五二四頁。譯、 六七 一頁。

「大論理學」、五二二頁。譯、七四頁。

C註一六)同、譯、四一九頁。譯註二一。

ー著、坂上絢一郎氏譯「ヘーゲル哲學解説」、三五四頁。

「小論理學」、二七六頁。譯、三二一頁。

(註一九)「大論理學」、五二七頁。譯、 八二 一三頁。

〈註二一〉、「小論理學」、二七九頁。。譯、三二四頁。 同、五二八頁。譯、八四頁。

二七九頁。譯、三二五頁。

**(註二三) レーニン著、廣島・直井兩氏譯「哲學ノート」、一五一頁。 ここで解説され** 一 一 八

一三〇頁。同じく「價値論爭史」、第一章參照。

「資本論」、第二卷、アドラッキー版、三五二頁。長谷部氏器、六六一頁。

同、第三卷、 ゲル著「法律哲學」、第一九一節、ガンス版、二五一 エンゲルス第六版、四一六 七頁。高畠氏譯、四一四 二一頁。田村實氏譯、下、

(註二八) 同、第一九二節。

「資本論」第一卷、 四六頁。譯一八五頁。傍點引用者。

ハ註三Ⅰ)「價値と價格」、九二一 丰 一五〇頁。